

ながいながい旅の終わるとき

イーノックがタワーの内部での戦いを始めてしばらくのことだった。突然、神への報告（セーブ）を終えたばかりのルシフェルがイーノックに真面目な顔で声を掛けた。

ルシ「…それだよ。」

イノ「えっ？何のことだろうか？」

ルシ「だから、それ。今のお前が言った…”ありがとう”、というやつ。それは、私が認識している人間達の一般的な言語としてのそれとは何か別のものなのか？」

イノ「…？」

ルシ「わからないか？チッ、念話が出来ない相手というのもこういう時は実に面倒だな…つまり、だ」

苦笑しつつ、トン、とルシフェルが自分の胸に親指を当てて言う。

ルシ「お前がそれを私に言う時、決まってこちら辺りに何だか変な感じがするんだ。…

イーノック、お前の、その”ありがとう”には、何か特別な意味でもあるのか？」

唐突な質問の意味を測りかねるといのように、きよとん、とルシフェルを見つめていたイーノックが、急に、ああ！という顔になって笑い出す。真面目な質問を笑われて、ルシフェルは面白くない顔。

ルシ「何だ？この私が真剣に訊いてやってるんだ、ちゃんと答えろ。わからんのなら別に…」

イノ「ごめん、そうじゃないんだ。ただ、あなたにそんな風に質問されるとは、あんまり意外だったので…笑ってしまってすまなかった。」

ルシ「謝らなくてもいいから、さっさと質問に答えろ。」

イノ「そうだな…これは私にとってだけのことも知れないけれど、”ありがとう”という言葉には…”私はあなたの存在を喜ぶ”、という意味があるんじゃないかと私は思うんだ。」

今度はルシフェルがきよとんとする。そういう子どものような表情をする時のルシフェルもやっぱり美しいな、とイーノックはこっそり思う。

ルシ「…”存在を、喜ぶ”？」

イノ「ああ。もっと言えば、”あなたが私と共に此処にいてくれて嬉しい”とか、”出会えた運命に感謝している”とか…そういうことをひっくるめて、うんと短く、ひと言でいうと”ありがとう”になるんじゃないかと。」

ルシ「…相変わらず、よくわからんな。」

目の前を分厚いカーテンのように遮る、どしゃぶりの雨。

崩壊したタワーの上層の開口部でイーノックが力なく座り込んでいる。押し潰されそうな豪雨にも全く構わずに、呆然と宙を見つめている。

ルシ「…お前はよく戦ったよ、イーノック。見事に生き残っていた墮天使共を全て倒した。しかし…。」

一旦言葉を区切って、ビニール傘の下から少しだけ痛ましげな目線を、蹲るイーノックに向ける。

ルシ「しかし厳密には、“神の計画”が止まることはない。あくまで“保留”していただけだ…。」

イノ「…あ…ああ…。」

ようやくイーノックの唇から洩れたのは、言葉としての意味をなさない声の断片でしかない。その背中に追いうちを掛けるように冷たく言い放つルシフェル。眼下には見渡す限りの、荒々しく濁った海原が広がっている。その巨大な水盤をさらに溢れさせようとするかの如く、激しい雨は天高くから地上へと降り注ぎ、ゴオオオッというその音響で全ての感覚を塗り潰して行く。

ルシ「…お前がタワーの中で戦っている間も、ずっと大気はアラート（警告）に満ちていた。天上の神から発せられ続けていたそれを、“無視”したのは人間たち自身だ…。」

イノ「あああああああああああ！！！！！！！！！！」

ついに濡れた地面に突っ伏し、悲痛に絶叫するイーノック。血が流れるのも構わずに拳を岩に何度も叩き付ける。それはまるで自分を責めるあまりに、壊してしまうのではないかとさえ思われた。

敵を全て倒しタワーを停止するという任務を果たしたが、それでも天界の洪水計画は止まらなかったのだ。

イーノックは半狂乱になってルシフェルに縋りつこうとし、何度か手で空を切りながら叫んだ。

イノ「神が…慈悲深い神が、こんなことをなさるはずがない！頼むルシフェル！時を巻き戻してくれ！」

その必死の叫びに、しかしルシフェルは淡々と応じてゆっくりと首を振る。

ルシ「すまないな、イーノック。私が神から与えられている力では、それは無理なんだ…。」

それでもイーノックは諦めきれずに懇願する。

イノ「ならば私を！天上界へ…神の御許へと連れて行ってくれ！直々にお願いするから！こんなことが…絶対にあってはならないんだ！これでは、余りにも残酷すぎる…！」

ルシ・語り 『人間世界の、田舎の村なんかは大抵、外から来た人間に対してひどく警戒心が強いものだが…そんな中でも子供というのは、どこの地域、いつの時代も好奇心旺盛で、面白そうと見れば勝手に向こうから寄って来るんだよ。そのあたり、知ってか知らずか…あいつはなかなか上手だったね…。』

旅の途中の村で、小さい子供らにじゃれつかれているイノ。いかつい凶体をして、黙ってニコニコと髪やローブをひっぱったりして遊ばれている。旅の話やせがまれ、切り株に腰掛けて訥々と喋ったり。

ルシ・語り 『ああ、あいつ…少し前に父をなくしたばかりの一人の女の子にとりわけ懐かれていたな。…あれは、大きな体のあいつに頼りがいや安心感を見たせいだろうか？微笑ましい眺めだったね…。』

村の友好的な雰囲気や久々にくつろいだ気分のイノ。女の子に胴体にぎゅっとしがみつかれている。

少女 「ねえ！あたしのこと、お嫁さんにしてくれる？」

イノ 「えっ…（汗）」

少女 「だって、一緒に旅したいんだもの！ねえ、連れてってくれるでしょう？ねえっ！お願い…」

困ったような笑い顔のイノ、やさしく少女の頭をなでてやる。

イノ 「…有り難う。でも、嬉しいけど、とても危険な旅なんだ…君は、まだ小さすぎるから…」

少女 「もう！そうやってすぐゴドモあつかいする！いいわよ、見てなさい！うんと美人になってやるから」

イノ 「ははは。参ったな…もう負けそうだよ。」

やがてイノが村を離れる日、半分泣きべそをかいていた女の子は、イノにつられて笑顔になると、大きく手を振っていつまでも見送ってくれた。

少女 「探してる人たち、見つかるといいね！そしたら、また帰ってきてね！わたし、待ってるから…！」

ルシ・語り 『…それから月日が流れた。人間の時間にすると、20数年というのは長いほうになるかな？…まあ、あどけない少女が、艶やかな大人の女に変わる位には、十分すぎる年数だったろうね…。』

遠い旅の空で、イノは昔なつかしい地名を耳にする。風の噂で、そこが原因不明の呪いに苦しめられているという。“…あの子が住んでいた村の名前だ！”イノ、とっさにかつて通った村へと歩き出している。

懐かしい村につくと人々も彼を見て驚き、喜んだ。しかし村には「呪い」のせいでかつての活気はない。